

14. 脳腫瘍に対するシンチカメラの診断価値

戸田 稻三 根来 真 井上昭一
林 誠之 浅井 昭 野村隆吉
(国立名古屋病院 脳外科)
木戸長一郎 金子 昌生
(愛知がんセンター 放診部)

脳腫瘍症例30例の ^{99m}Tc による脳シンチカメラの陽性率は76.7%であり、Meningioma, Astrocytoma (Gr 2-3) は特に成績が良かった。腫瘍の発生部位制では、大脳半球の腫瘍は診断率が良く90%であったのに対し、頭蓋底周辺のものでは50%であった。

天幕下腫瘍の陽性率は75%で、良好な結果を得た。脳シンチカメラの診断率76.7%は、脳血管写の診断率80%に比べ、多少劣る。

しかし脳血管写は正常で、脳シンチカメラが陽性に出た症例は3例あり、全例が脳原発の悪性腫瘍であった。このように大脳後半分、視床近傍の悪性グリオームの診断では、脳血管写より脳シンチカメラが優っていた、

脳血管写にも20%の false negative があり、これに小児や重症患者にでも苦痛を与えることなく行ないうる脳シンチカメラを併用することにより診断の精度を著しく向上させることができる。

質問： 仙田 宏平 (岐阜大学 放射線部)

- ① 一般に脳シンチグラムは3時間よりもっと早い時期に静注直後のものを含め撮像して読むのが一般のようですがいかがでしょうか。
- ② chorioid plex の出現に対してどのような処理をされましたか。
- ③ 転移性脳腫瘍の種類の基によるシンチグラムの比較をされましたか。

答： 戸田 稻三 (愛知がんセンター脳外科)

- ① 脈絡叢の hot spot に対して特に意識しなかった。
- ② 転移腫瘍の種類については、頭蓋底転移のものは、back ground activity により hot spot として認めにくかった。

追加： 野村 隆吉 (国立名古屋病院)

従来最も診断価値が高いとされている脳血管造影に比べて時には更に高い部位や組織の診断が得られる点は本法の最も有用な点で、その後の手術、放射線治療をすすめる上で大変役立つのです。今後もっとこの研究をすす

めて一層有用な方法にしたいと思っております。

*

15. セクレチンを使用せる膵シンチグラフィ

桜井邦輝 金子昌生
(愛知県がんセンター放射線診療部)
中村 昌男
(加茂病院内科)

^{75}Se セレノメチオニン静注直後にセクレチン100単位を静注して施行した膵シンチグラフィ18例中の正常例10例と at random に選んだ ^{75}Se セレノメチオニン静注のみによる膵シンチグラフィ10例を比較した。正常であるか否かは、臨床経過、血液尿生化学検査、シンチグラム所見より判定した。

シンチグラム上、膵頭部濃度が、左肝葉部最高濃度かそれ以上の例はセクレチン使用群も非使用群も9例である。セクレチン使用群の1例は右肝葉最高濃度に匹敵する濃度を呈した。静注後15分後と60分後のシンチグラムを比較すると膵の描出性が15分後の方が良い例は、セクレチン使用群では3例、非使用例は2例である。15万カウントに要する時間は肝臓のシンチグラム上への包含の多少により大きく影響されるが、両群に差は認められない。総じて、膵シンチにセクレチン使用の必要性は認められなかった。

*

16. 骨髄シンチグラフィ

第1報 実験的考察

今枝孟義 仙田宏平
(岐阜大学 放射線部)
中沢信彦 新田一夫
(第1ラジオアイソトープ研究所)

骨髄シンチ用 ^{99m}TcS colloid を gelatin にて調製し、1.5~2mCi を家兎に静注して体内分布を調べた。更に比較するために現在肝シンチ用に市販されている ^{198}Au colloid (100 μCi 静注), 3 RI メーカーの ^{99m}TcS colloid (1.5~2mCi 静注) についても調べた。実験方法は各々について5羽ごとの正常家兎 (2.5~3kg) を用い静注30分後に屠殺し、肝、脾、腎、大腿部骨髄、肺、心内血液の mg・あたりの count/min. を求めた。